

シレットコ世界自然遺産への アイヌ民族の参画と研究者の役割

愛努民族對知床（Shiretoko）世界自然遺産的參與和研究者所扮演的角色

Ainu's Participation in Maintaining Shiretoko,
a World Natural Heritage Site and the Roles Played by the Researchers

小野有五 北海道大学大学院地球環境科学研究科 地球生態学講座 教授

黃柏豪 翻譯

1. シレットコ世界自然遺産の選定過程におけるアイヌ民族の不在と政府の非協力的態度

「シレットコ」はアイヌ語のSiretoko(Sir大地 + etoko末端)は、岬の意味である。一般的には「知床」という漢字でかけられるが、知床はまったくの当て字であり、知るとか床とかという意味はまったくない。よってここでは、できる限り「シレットコ」とカタカナで表記する。

日本政府は2004年1月にシレットコを世界自然遺産候補地に決定し、ユネスコの世界遺産委員会に推薦書をおくった。ところが元になった計画書には、地名がアイヌ語に由来す



1・愛努民族在知床（Shiretoko）世界自然遺産的選定過程中缺席與政府不合作的態度

「知床（Siretoko）」是愛努語（Sir大地 + etoko 末端），意為岬角。一般漢字雖寫作「知床」，但知床兩字只不過是照發音寫出來的同音漢字，原文並沒有「知道」或是「床」等的意義。因此在此盡可能的以「Shiretoko」羅馬拼音型式來表記。

日本政府在2004年1月將Shiretoko 列為世界遺產候選地之一，對聯合國教科文組織送出了推荐函。不過原本的計畫書除了地名源自於愛努語以外，完全沒有提到遺產地區和愛努民族之間的關聯。一方面，在國外有紐西蘭的東加里羅

ること以外、遺産地域とアイヌ民族とかかわりについてはまったく触れられていなかった。国外ではニュージーランドのトンガリロやオーストラリアのウルルーなど、先住民族との関わりを重視した世界遺産がある一方、日本というローカルな社会は、世界遺産に関してアイヌ民族を最初から排除していた。

また、国にアイヌ民族の存在を訴えるべきである北海道庁は、国に対してアイヌ民族の参画を促す行動をとることもなければ、世界遺産が先住民族にとって持つ意味をアイヌ民族に伝えることもなかった。北海道は問題が複雑化することを恐れ、北海道ウタリ協会からの要請を積極的に支援しなかったどころか、筆者が実際に見聞きした事実にもとづくと、北海道ウタリ協会に対して、「『イオル再生計画』の早期実現を望むなら『シレットコ世界遺産』への関与を求めるな」という強い姿勢をとっていたと思われる。イオル（iwor、イウオロともいう）とは、アイヌ民族の狩猟などに際してのなわばりと考えられており、流域単位でかなり広い面積を確保し、「イオル再生計画」はアイヌ民族の伝統的な儀式などの必要な自然資源を再生・回復することを目的にしている。北海道はアイヌ文化法を受けて、「イオル再生計画」を打ち上げ、数年来、北海道ウタリ協会とその実現に向けて協

(Tongariro) 及澳洲的烏魯魯 (Uluru) 等等重視和先住民族之間關聯的世界遺產，另一方面，日本這一個地方性的社會，卻在世界遺產面一開始便排除了愛努民族。

並且，若是本來應該對國家訴求愛努民族存在的北海道廳，不僅沒有向國家促請愛努民族參與策劃的行動，也沒有把世界遺產對於先住民族的意義傳達給愛努民族。北海道因害怕問題的複雜化，慢說沒有積極的支援來自於北海道 Utari 協會的要求，基於筆者實際見聞到的事實，筆者認為北海道對於北海道 Utari 協會採取了「如果希望『Iwor 再生計畫』盡早實現的話就不應該要求參與『Shiretoko 世界遺產』計畫」這樣的強硬姿勢。「Iwor 再生計畫」目的在以流域為單位確保相當的土地面積，使在愛努民族的傳統儀式時等所必要的自然資源可以再生、回復，Iwor 被認為是指愛努民族在狩獵時的勢力範圍。北海道接受了愛努文化法，完成了「Iwor 再生計畫」，近年來正和北海道 Utari 協會朝向實現該計畫的方向進行協議。該計畫的早點實現，對於北海道 Utari 協會來說是最重要的課題。

議中であつた。その早期実現は、北海道ウタリ協会にとっての最重要課題だったのだ。

2. 日本社会におけるアイヌ民族への支配構造と運動者＝研究者の役割

現在、北海道に居住するアイヌ民族人口は、1999年のセンサスでは、約24,000人とされている。この人々は(A)アイヌであるという明確なアイデンティティをもっている、と言えよう。そのうち、北海道ウタリ協会の会員はほぼ約4,000人にすぎない。この他、アイヌ民族を代表とする小規模なNPO（法人格ではないのが普通である）の会員がいて、この中には北海道ウタリ協会の会員である人と、そうではない人とがいる。またいずれの組織にも属さない人々がいる。なお、北海道ウタリ協会に属しているのは北海道在住のアイヌ民族だけであり、東京や本州の他地域にいる(A)の人々は、センサスには含まれていない。それ以外に、(B)アイヌであることを隠している人々、(C)アイヌであることをまだ知らずにいる人々がいる。(B)や(C)のような人々の数は(A)の人々より実際にははるかに多いと思われる。アイヌであることを社会的に明らかにすると、さまざまな面で不利益や差別を受ける状況が、今も続いているからである。

問題なのは、上述したようなアイヌ民族の社

2・日本社会對於愛努民族的支配構造與運動者＝研究者的角色

現在居住在北海道的愛努民族人口，在1999年的人口普查約有24,000人。換言之，這些人們有著(A)自己是愛努民族這樣明確的自我認同。其中，北海道Utari協會的會員不過只有將近4,000人。此外也有代表愛努民族的小規模NPO（非營利組織，通常不是法人團體）的會員，此中有北海道Utari協會的會員的人，和並非如此的人。另外還有不屬於任何組織的人。並且，屬於北海道Utari協會會員的只有居於北海道的愛努民族，在東京及本州的其他地區屬於(A)的人們並不包含在人口普查當中。在以上所述之外還有(B)隱藏自己是愛努民族的人們，(C)還不知道自己是愛努民族的一員的人們在。像(B)及(C)這樣的人們的數量跟(A)的人們比起來實際上可能還要多更多。這是因為對社會表明自己為愛努民族的一員後，在各層面受到損害以及歧視等的狀況，至今仍然持續著。

問題是，如同上述的愛努民族社會，

会が、和人を中心とする行政組織によって完全に支配される体制になっていることである。国はアイヌ民族に対しさまざまな事業費を出しているが、それを監督するのが北海道であり、北海道は北海道庁の生活環境部にアイヌ施策推進グループを設け、さらに和人が北海道ウタリ協会の事務局長と事務局次長のポストを占めることで、情報や予算を制約しているといえる。

シレットコ世界遺産においては、その主務官庁は環境省であり、環境省は北海道と密接な連携をもちつつIUCN（国際自然保護連合）との交渉を行なうが、アイヌ民族の社会とはまったく関係をもっていない。したがって北海道が伝えない限り、シレットコ世界遺産に関わる詳しい情報は北海道ウタリ協会には入らないしくみになっているのである。

筆者はこのことを特に研究したわけではなく、運動をしているうちにそのような構造が見えてきた、というにすぎない。研究者としては、このような支配構造をもたらした要因や政治的・社会的な力関係をさらに深く明らかにすべきであろうが、運動者としては、シレットコ世界遺産問題から完全に切り離されてきたアイヌ民族を環境省や北海道、IUCNに結びつけることが、もっとも緊急でかつ重要な活動となる。研究者＝運動者の矢印は、アイヌ民族の社会にも向けられているだけでなく、支配的な立場にある環境省や北海道、IUCNにも向けられている。重要な

是在以和人為中心的行政組織完全支配的體制之下。國家對愛努民族支出了各種各樣的公共預算，而行監督的是北海道，北海道在北海道廳的生活環境部設了愛努政策推動小組，並且和人佔據了北海道 Utari 協會的事務局長和次長的位置，可說制約了資訊和預算。

至於 Shiretoko 世界遺產，其主管機關為環境省，環境省與北海道在緊密的合作之下和 IUCN(國際自然保育聯盟)進行交涉，但和愛努民族的社會間則完全沒有任何關聯。因此形成了只要北海道不居中傳達，關於 Shiretoko 世界遺產的詳細資訊便不會為北海道 Utari 協會所知的此一構造。

筆者並沒有針對此事特別去研究過，只是在從事運動的過程中逐漸看出了這樣子的構造而已。做為研究者，應該更深切地究明形成此樣的支配構造的因素，以及政治的社會的力量關係，但做為運動者，將自 Shiretoko 世界遺產問題完全分離出的愛努民族和環境省及北海道、IUCN 連結在一起這件事本身，則是最緊急也是最重要的活動。研究者＝運動者的箭頭，不但只指向著愛努民族的社會，也向著處在支配的立場的環境省及北海道、IUCN。重要的是消除愛努民族在社會全

シレットコ世界自然遺産へのアイヌ民族の参画と研究者の役割

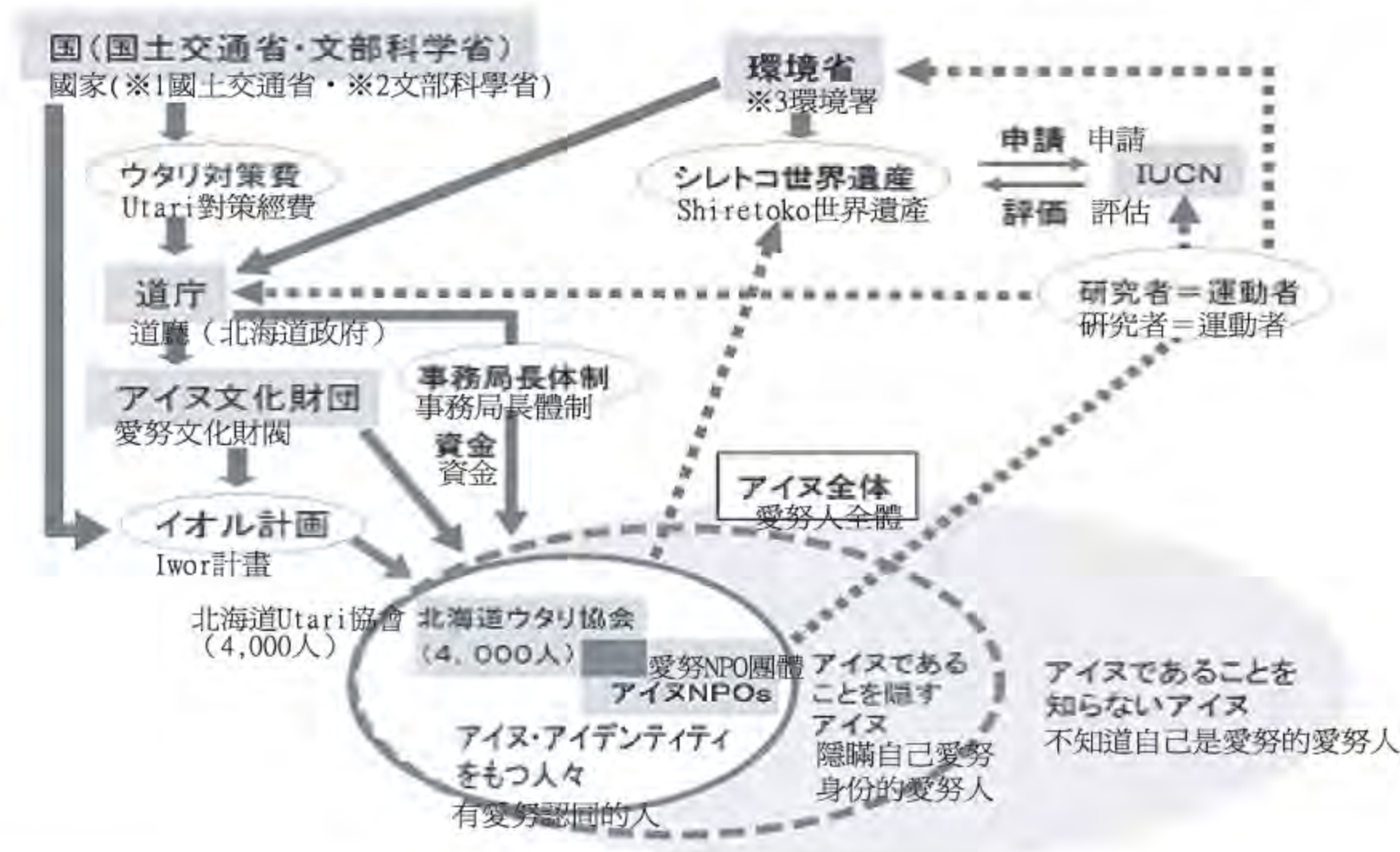
のは、日本社会のなかでアイヌ民族の社会全体が受けている不平等な位置づけをなくすことである。

研究は運動を成功に導くためにある、というのが筆者の立場である。2004年まで、行政に対しても、当のアイヌ民族に対しても、世界遺産問題

體之中所受到的不平等定位。

研究是為了將運動導向成功，是筆者的立場。至2004年為止，對行政，對愛努民族來說，世界遺產問題可以說根本沒有存

※1 相等於台灣的交通部
 ※2 相當於台灣的教育部
 ※3 相當於台灣的環保署



和人が権力を独占する日本社会におけるアイヌ民族への支配構造と、研究者＝運動者の役割
 和人獨占權力的日本社會對於愛努民族的支配構造與運動者＝研究者的角色

は存在すらしていなかったといえる。そのような中で必要なのは、「問題を問題として認識できる人間がまず動くべきではないか」という認識である。研究者こそ、そういう人間であろう。

3. 世界自然遺産地域での先住民族エコツーリズム

筆者らは、アイヌ民族が「シレットコ世界自然遺産地域での先住民族エコツーリズムの主体としての立場から遺産地域の自然資源の管理に関わる」

在過。在這之中所需要的是「可以把問題做為問題來認識的人是不是應該首先採取行動？」這樣的認知。研究者，正可說是這一種人吧。

3・在世界自然遺産地區的先住民族生態旅遊

筆者等人對 IUCN，提出了愛努民族在「Shiretoko 世界自然遺産地區以為先住民族生態旅遊主體的立場參與遺產地區的自

という提案をIUCNに行なってきた。先住民族が自らの文化を主体的に発信するとともに、これまで外部資本や非・先住民族側に握られてきた観光業を自らのビジネスとして取り返し、先住民族としての経済的な自立、若い世代の雇用確保、文化の伝承を図るのが、先住民族エコツーリズムである。

先住民族エコツーリズムを可能にするためには、当然のことながら先住民族の伝統的な自然利用が保障されなければならない。アイヌ民族の伝統的な自然利用としては、サケの漁獲や河川の利用・管理権の回復が重要である。国際的に、先住民族への対応を配慮せざるを得ない「世界遺産」という「肩書き」において、まず先住民族エコツーリズムというビジネスの場におけるサケ漁獲を復活させ、ついで国の進めるイオル再生計画において権利回復を行い、最終的には北海道内すべての河川におけるアイヌ民族の本来の漁獲権を回復しようという戦略である。日本政府は、1878-80年にかけて北海道内の主要河川でのアイヌ民族によるサケ漁すべてを禁止した。以後、アイヌ民族のサケ漁業権は回復されていない。この意味で、アイヌ民族はいまだに明治10年代の状態におかれている。

また、さまざまな利害関係にあるアイヌ民族の人々の参画を可能にする方法として、地元シレットコの北海道ウタリ協会斜里支部と羅臼支部を中心に、「シレットコ先住民族エコツーリズム研究会

然資源管理」の提案。先住民族在以自己的文化為主體發出訊息的同時，還能夠試圖將至今一直由外部資本以及非先住民方面所掌握的觀光業取回做為自己的事業，並且達成先住民族的經濟性獨立，確保年輕世代就業及文化的傳承，也就是先住民族生態旅遊。

為了使先住民族生態旅遊成為可能，當然必須先保障先住民族進行傳統自然利用的權利。做為愛努民族傳統的自然利用，捕鮭魚及河川利用管理權的回復相當重要。做為戰略，在國際上，對於「世界遺產」這一個不得不去考慮對於如何去對應先住民族的「頭銜」，首先需讓站在先住民族生態旅遊這個商業立場上的捕鮭魚復活，並且基於國家推行的Iwor再生計畫進行愛努民族權利的回復，最終要回復愛努民族本來在北海道內所有河川的漁獲權。日本政府在1878-80年之間禁止了所有在北海道內主要河川由愛努民族所進行的捕鮭魚活動，此後，愛努民族的鮭魚漁獵權並沒有回復。在這個意義上，愛努民族至今仍被置於明治10年代的狀態。

並且，做為一個使居於各種利害關係之間的愛努人們的參加成為可能的方法，以當地Shiretoko的北海道Utari協會斜里支部與羅臼支部為中心，在2005年4月成

シレットコ世界自然遺産へのアイヌ民族の参画と研究者の役割

(Siretoko Indigenous Eco-Tourism Research Union: SIPETRU)」を2005年4月に立ち上げた。この組織は、地元の2つの支部が中心となることで地域の利益を優先させるとともに、札幌にある北海道ウタリ協会本部との連携も維持する。いっぽう、「研究会」という独自の立場は、北海道ウタリ協会以外の人々に対しても、研究会の主旨に賛同する限りそこに参加することを可能にする。研究会は、成功しつつあるマオリ・エコツーリズムをモデルにし、2005年7月1日より、まだモニター・ツアーの段階ではあるが、シレットコでのアイヌ民族エコツアーを始めている。

2005年7月14日、ユネスコ会議でIUCNは、シレットコを世界自然遺産として認める公式文書において、「アイヌ民族の代表者たちが、たとえば北海道ウタリ(アイヌ)協会などを通じて、伝統的な儀式や世界遺産として推薦された地域の利用にかかる適切なエコツーリズムの開発を含めたかたちで、推薦地域の将来の管理に関与することが重要であると考えられる」という勧告を出した。この勧告は、IUCNへの要請を行なったアイヌ民族の意向を最大限に尊重したものだといえる。

4. アイヌ民族による運動と筆者の働きかけ

2004年1月末、日本政府によってユネスコに提出された推薦書や管理計画にアイヌ民族への言及がなく、管理計画へのアイヌ民族の参画がまっ

立了「Shiretoko 先住民族生態旅遊研究会 (Siretoko Indigenous Eco-Tourism Research Union: SIPETRU)」。這個組織在以當地的兩個支部為中心的情況下，可以以地區的利益為優先，同時也維持了和位於札幌的北海道 Utari 協會本部之間的合作。另一方面，基於「研究會」這一個獨自的立場，對於北海道 Utari 協會以外的人們，只要贊同研究會的主旨也可以參加研究會。研究會以持續成功的毛利生態旅遊為藍本，雖還在試辦階段，自 2005 年 1 月已經開始了在 Shiretoko 的愛努民族生態旅遊。

2005 年 7 月 14 日，在聯合國教科文組織的會議上，IUCN 於認同將 Shiretoko 做為世界自然遺產的官方文書當中發出了勸告：「愛努民族的代表者們，即使通過北海道 Utari(愛努)協會等等，應以包含在傳統的儀式及做為世界遺產被推薦的地區利用且適當的生態旅遊開發當中的形式，參與推荐地區將來的管理一事相當的重要。」這個勸告，可說是對於對 IUCN 提出訴求的愛努民族意向的最大尊重。

4・由愛努民族所進行的運動與筆者的行動

2004 年 1 月末，知道了日本政府對聯合國教科文組織提出的推荐書及管理計畫之中沒有言及到愛努民族，也沒有考慮到愛努

たく考慮されていないことを知った筆者は、アイヌ民族の友人にそれを知らせるとともに、北海道ウタリ協会札幌支部の集会において、何らかの行動を起こすべきであることを訴えた。

同年5月には国連の先住民族問題に関する常設フォーラムで、北海道ウタリ協会の理事により、「シレットコ世界遺産登録にかかわるアイヌ民族関与の欠如に関する声明」がで発表された。日本国内ではこのことは報道すらされなかったが、海外での反響は大きく、IUCNはこれによって初めてシレットコ世界遺産地域における「アイヌ民族問題」を知った。

また、同年7月にはIUCNのディヴィッド・シェパード保護地域事業部長がシレットコの現地を視察することになった。そこで筆者らが行なったのは、シェパード氏に電子メールや手紙を送り、アイヌ民族がシレットコ世界遺産の選定の過程で不当に無視されてきたこと、今後の遺産地域の管理計画にも入れられていないことをまず知らせるとともに、7月の来訪時にアイヌ民族との会見を要請することであった。しかし、環境省や北海道の非協力的な態度により、最終的には、北海道ウタリ協会理事長一人が、7月20日、公式レセプションの会場で非公式にシェパード氏と話すことのみが許可されただけだった。

また、筆者もパーティに参加したが、筆者の役割はアイヌ民族の関係者で作成した要請文書の英訳

民族對管理計畫之參與的筆者，在讓愛努民族的友人知道這件事的同時，也在北海道 Utari 協會札幌支部的集會上呼籲該做出行動。

同年5月在聯合國關於先住民族問題的常設論壇上，由北海道 Utari 協會的理事長發表了「愛努民族沒有參加 Shiretoko 世界遺產登錄」的聲明。在日本國內並沒有報導這一件消息，但是在海外引起了相當大的回響，IUCN 藉此初次了解到了在 Shiretoko 世界遺產地區的「愛努民族問題」。

並且，在同年七月 IUCN 的保護地區事業部長 David Shepherd 前往視察了 Shiretoko 當地的情況。在此筆者進行的是，對 Shepherd 先生送出了電子郵件及信件等，在讓他了解愛努民族在 Shiretoko 世界遺產的選定過程中被不當的忽視，以及沒有被列入今後的遺產地區管理計畫當中的同時，也要求他在七月來訪時與愛努民族會面。但是在環境省以及北海道的不合作的態度之下，最終只有北海道 Utari 協會理事長一個人被允許在7月20日的官方公開發表會的會場上與 Shepherd 先生進行非正式的對話。

另外，筆者也參加了活動，筆者的角色是把由愛努民族的關係者所製作的請

シレットコ世界自然遺産へのアイヌ民族の参画と研究者の役割

をシェパード氏に手渡し、その意図を説明することであった。この要請文書は北海道ウタリ協会からの正式な要請文書となるはずのものであったが、北海道はそれをそのまま英訳せず、きわめて簡略化していたのだ。

一方、北海道ウタリ協会のこうした対応に満足しなかったアイヌ民族の関係者は、それぞれが主導するNPO団体（非法人）を中心として独自の行動を始め、IUCNに「シレットコ世界遺産」への参画を求める文書を送付したり、直接、スイスにあるIUCNの事務局を訪問して要請行動を行なった。これらの要請行動は大きな成果を上げ、IUCN事務局からは、「アイヌ民族の関与を考慮したい」という回答を得ることができたのである。

〔後記〕本稿は日本環境社会学会の機関誌『環境社会学研究』Vol.12・特集「世界遺産」に掲載されたものを短縮したものである。

願書英譯版交給 Shepherd 先生，並且說明該意圖。這份請願書本應由北海道 Utari 協會所提出的正式請願書，但北海道不僅沒有完全英譯，而且極其簡略。

另一方，對北海道 Utari 協會所提出的對應不滿的愛努民族關係者，以他們各自主導的 NPO 團體（非法人）為中心開始了獨自的行動，對 IUCN 送出了要求參加「Shiretoko 世界遺產」計畫的文書，也直接訪問了在瑞士的 IUCN 事務局並進行了請願活動。這些請願運動獲得了相當的成果，自 IUCN 事務局得到了「願考慮愛努民族的參與」的回答。

〔後記〕本稿原發表於日本環境社會學會的期刊《環境社會學研究》Vol.12、「世界遺產」特刊（2006，東京：有斐閣），本稿為其縮簡版。



◀ 聯合國教科文組織網站對於北海道知床世界自然遺產的簡介。
(<http://whc.unesco.org/en/list/1193>)